

越境と躍動のフィールドワーク⑩

平日の革命記念日

百村帝彦

東京大学農学共同研究員（森林環境学）

ラオスの首都、ビエンチャンの役所で聞き取りをしていたが、この日は革命記念日で祝日となり休みだ。役所回りもできないし、ただホテルでパソコンとにらめっこするのも勿体ない。知り合いがビエンチャン近郊の村に調査に行くというので同行させてもらった。訪れた村はビエンチャン平野では少ない山岳少数民族の移住村だ。ここで古老からいろいろと話を聞く。ラオス内戦のころ、この地に住みついた。丘陵地であり、水田は少ないが家畜飼育や外国に移住した親族からの仕送りで生計を立てているという。比較的森林が多く残っており、森の幸である非木材森林産物の採取も行っており、手工芸を作成し、それなりの収入を得ている。

うなるだろう。

あの村を訪問してからもう一〇年近く経過している。援助プロジェクトももうとづくに終わっているはずだ。あの灌漑設備はどうなっているのだろう。自分を見直すためにも、またあの古老に会って話を聞いてみたい衝動に駆られた。



図3 村落開発プロジェクトが村に導入されることで盛大なセレモニーがおこなわれた。郡の役人、村長や村人だけではなく軍人も参加している。その後、このプロジェクトはどうなっていったのであろう。2000年撮影。



図4 村人から森林の状況を聞き取る。2005年撮影。

一方でこの村は、援助機関によって農村開発が支援されている村でもあった。少数民族の移住村で、ラオス農業の基盤である水田が非常に少ないという点もあり、近隣村と比べて貧しく見えたようで、対象村と選ばれたらしい。村にはこれまで車で入れる道はなかったが、援助によって新しく道ができた。広く整備された道とそれに沿って伸びる水田用の灌漑水路は立派だったが、村の屋敷地の風景とのギャップは、あまりにも似つかわしくないものであった。

聞き取りを終える前、念のため古老に今日のことを知っているかどうか聞いてみた。「今日は何の日ですか」、「今日は普通の日だ、何の日でもないよ」。「でも今日は子供たちも学校が休

みで、休日じゃないですか」、「今日は彼ら（ラオス人）の休日で、我々には関係がない」。ハッと気がついた。当たり前前のことだ。役所回りを続けたあとだったこともあり、今日は休日なのだと思い込んでいた。多くの民族を抱えるこのラオスにとって、今日という日はあくまで国をひとつするための政策のひとつではない。

フィールド調査をおこなっていると、それまで当たり前だと思い込んでしまっていることが、実は全く勘違いをしまっていたということがある。しかし、それもフィールドにもぐり込んでいくうちに、解き明かされ少しずつ実態に近づいていくことができる。しかし、それが大きな事業やプロジェクトでミスリードしてしまつたら、ど